

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Manner-describing Function of English Verb

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 1986-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 道雄, Nakano, Michio メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2278 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



英語動詞の様態表現性

中野道雄

(1)

英語の *idiom* という語に、辞書は次¹⁾の定義を与えている。

- 1) the language or dialect of a people, region, class, etc.
- 2) the usual way in which the words of a particular language are joined together to express thought
- 3) an accepted phrase, construction, or expression contrary to the usual patterns of the language or having a meaning different from the literal (Ex.: not a word did he say; to catch one's eye)
- 4) the style of expression characteristic of an individual [the *idiom* of Carlyle]
- 5) a characteristic style, as in art or music

1)は、たとえば、フランス語のことを *the French idiom* といったり、「ニュー・イングランドの田舎ことば」のことを *the idiom of the New England countryside* ²⁾ ということをしてさしている。これらは、それぞれ *the French language, the dialect of the New England countryside* というのがふつうだが、*idiom* を用いると、他の言語、方言との対比において、「特徴ある」

1) *Webster's New World Dictionary of the American Language* (Second College Edition)

なお、本稿で引用している語の定義は、特に断わらないものは、すべて同辞書のものである。

2) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*

といったニュアンスが生じる。次もその用例である。

He looks forward with simple, childlike pleasure ... to exercising again his command of American idiom, grown a little rusty over the years from disuse [PLACES³⁾

(彼[アメリカに赴任しようとしているイギリス人教授]は、長年使っていないので、いささか、さびついているアメリカ英語をふたたび練習できることを、単純に、子供っぽい気持ちで楽しみにしている。)

4), 5)の語義は、1)と基本的には同じで、それが個々の作家、あるいは芸術のジャンルに適用された場合で、the idiom of Carlyle といえ、トーマス・カーライル特有の文体あるいは表現法を、また the idiom of jazz といえ、和音やリズムに見られるジャズ特有の表現法をさしている。

3)は、ふつう idiom という語でわれわれが理解しているところの語義で、いわゆる慣用句・慣用表現のことである。それは、語(word)や節(clause)の形をとっていることもあるが、ふつう、句(phrase)の形のことをいう。

ところで、この上掲の定義のこの項に関する部分は必ずしも満足なものではない。「文字どおりの意味とは異なるもの」というのは、あてはまらない場合もあるし、少なくとも、もっとも適切ではないことが多い。

たとえば、用例としてあげられている catch one's eye は、「～の視線をとらえる」という意味である。catch の文字どおりの意味が「手でとらえる」であるとするなら、このフレーズの意味は文字どおりではないが、catch という語の語義自体、具体的、肉体的動作から、意味が多かれ少なかれ拡大しているのであって、そのことを考えれば catch one's eye は文字どおりの意味といえなくもない。つまり「文字どおり」(literary)という語自体があいまいであるから、定義としてあまり有効でありえないわけである。

3) 出典は略記している。引用出典表参照。

日本語の「腹を立てる」というのは **idiom** といえるが、これを「腹を押さえる⁴⁾」という場合とくらべてみよう。後者の場合は、「腹(を)」「押さえる」という語単位の素材が与えられていて組み合わせられたフレーズである。このとき、「頭を・押さえる」「口を・押さえる」/「腹を・さする」「腹を・たたく」などの組み合わせとの対比において撰ばれている。このようなフレーズは **idiom** とはいえない。

一方「腹を立てる」の場合は、このフレーズ全体で「怒る」という一語に相当する材料として、表現者に与えられている。表現者は、「腹(を)」「立てる」でなく、「腹を立てる」として与えられているのだから、これを否定形にするとき、「腹を立て・ない」としかできない。これは、「怒る」の否定形は「怒ら・ない」であって、「怒る」という語の内部をさわることができないのと同じである。

これは、また、**idiom** といえば、ふつうフレーズの形式を想起することの理由でもある。というのは、「腹を立てる」という形式をとっているから、解釈上、「腹(を)」「立てる」のように分離することも表面的には可能であり、したがって、これらの語の組み合わせが他の意味を表わしうるという可能性が感じられ、それにもかかわらず、「怒る」という特定の意味に限定されるという感じを生むのである。

しかし、このような意味的条件をそなえていれば、ただちに、そのフレーズを **idiom** というわけではない。もう一つの必要条件は慣用性である。これが上の定義にある **accepted** という部分である。つまり、その意味を表わすために、そのフレーズを用いるということが、その言語社会で受け入れられている必要がある。たとえば、ある人が「腹がねじ曲がる」と表現して、「腹が立つ」という意味であると文脈上理解されたとしても、それが一般的に理解され、用いられているのでなければ **idiom** とはいえないのである。

4) 「持病が出たのか、彼女は、また腹を押さえている」などの文脈で。

2)の定義は、いわば、1)と3)の中間的なものであり、1)のように、ある言語や方言の全体に言及しているのではなく、特定の表現法や構文をさす。かといって、3)のような辞書项目的なフレーズとしてとり出せないものである。

たとえば、次節でとりあげる構文に次のものがある。

A) He patted my shoulder.

B) He patted me on the shoulder.

このA)とB)は、ほとんど同じ意味を表わしている。このうち、B)が、少なくとも日本語にくらべて、英語に特徴的な構文、したがって2)の意味の idiom⁵⁾といえる。A)は、表現論上、日本語の「彼は私の肩をたたいた」と同じと見てよい。そして、それはまた、論理思想上、より自然な形であり、おそらく、言語において、より普遍的な形と思われる。

しかし、B)もA)と同じほど、英語では、ふつうの表現法である。一方、また、これは pat という動詞や shoulder という名詞に特定のことではないので、3)の意味の idiom とは異なる。このようなものを2)の意味の idiom と見なしたい。訳語としては「慣用的表現法」といえばあたるかと思う。

3)のタイプ、つまり、ふつうの慣用句は、日本語、英語など特定の言語の内部のみを視野にとっても、その存在は明らかであるのに対し、2)のタイプのものは、他の言語と対照的に観察してはじめて認識される場合が多い。したがって、その分析も充分に行なわれていない。しかし、日本語、英語などの「らしさ」を形づくっているのは、むしろ、この慣用的表現法であるといえなくはないだろう。

5) この構文はドイツ語にもある。このことは、本稿でとりあげる他の表現法でも、後注でも示すように、多かれ少なかれいえることである。本稿は日英語対照の立場から述べているが、ドイツ語・フランス語などくらべても、なお英語的といえる特徴については、視点、機会を改めて考察しなければならない。

6) cf. 国広 (1970), pp. 233-235.

本稿では、以下、このタイプの **idiom** をいくつか挙げて概観し、次にその一つについて、やや詳しく見ることにする。

(2)

前節で述べた表現法として次のようなものがあげられる。

1) 無生物主語表現

無生物主語表現とは、その中に用いられる動詞が、本来、生物を主語にとるはずのところを、事柄や物を主語として述べる構文である。

The next turn of the road brought them out from among the trees, ... [HORSE]

(その道を次に曲ったところで、[彼らは] 木々の間から抜け出した。)

The anticipation of the picnic brought a smile. [DEEP]

(ピクニックに行けるのだと思うと[彼女は]ニッコリとした。)

これらの例文中の **take, bring** は、「(人を)～に連れていく」「(人に)～を持ってくる」という意味で、本来は、生物が主語であるべきはずである。日本語でも、上の例文の訳として、「～を～へ導いた」「～に微笑を浮かべさせた」「～に微笑をもたらした」などとすることもできるが、それはかなり直訳調で、固苦しすぎる表現となる。もっとも、英語でもこの構文は **informal** なものとはいえないが、日本語におけるよりは、ずっとふつうの表現法である。

2) 分割的表現

動作が及ぶ対象(人、動物)について、まずその全体に言及し、次にその部分に言及する表現法。

Rex seized her by the elbow and forced her to come to a halt.

[LAUGHTER]

(レックスは彼女のひじをつかんで制止した。)

He clasped melinda around the waist. [DEEP]

(彼はメリンダの腰をしっかりとかかえた。)

日本語では、「ひじのところで彼女をつかんだ」「腰で彼女をかかえた」などということとはできない。

この表現法に用いられる動詞には、

<打つ> beat, clobber, hit, punch, slap, strike; <つく> nudge, poke, prod; <ふれる> kiss, touch; <つかむ> catch, clutch, grab, grip, seize, grasp, clasp, hold; <ひく> pull などがあ⁷⁾る。

3) 受動態による感情表現

日本語で「驚く」というとき、英語では be surprised の形をとることが多い。つまり「[日]自動詞/[英]受動態」の対立になっている。英語では surprise という他動詞がまずあって、それを受身にして、感情表現にあてているという感じである。それに対し、日本語では、「驚く」というのは、はじめから自動詞である。

このような英語の表現法は、pleased, satisfied, embarrassed, disappointed, annoyed, puzzled, brightened, excited, interested など心の動きを表わす動詞に多く見られる。⁸⁾

なお、英語では、The news of his death surprised her の形も、ふつうに生じる。日本語では、「彼女の死のしらせは彼女を驚かせた」はかなり

7) 宮尾 (1982)

8) 国広 (1970), pp. 235-236. 田桐 (1965) pp. 54-56.

bookish で直訳調という感じがする。「彼が死んだというしらせに、彼女は驚いた」となるだろう。ただし、人主語のときは、「奥さんを困らせてばかりいる」「びっくりさせるなよ」など可能である。

4) “He thank you” 型間接話法

話法の用法にも、日本語と英語の間で、いくらかの差異が見られるが、次の例のような表現法もその一つである。

He merely wished Emil a pleasant journey, and asked his mother how she was, and hoped business was good. [EMIL]

(彼は、エミールに、「楽しい旅行を祈っているよ」といい、それから、おかあさんに「お元気ですか？ 商売のほうはどうですか」と訊いただけだった。)

この例文を「彼はエミールのために楽しい旅行を願った」とすると、「心の中で（本当に）願った」の意味になる。英語でも、その場合もあるが、ふつうには、「口に出して、その意味のことをいった」の意味である。つまり、上掲の英文を直接話法に書きかえると、He said, “Emil, I wish you a pleasant journey” のようになるだろう。

このような話法は、あいさつや決まり文句的な場合によく生じる。He thanked you. (彼はあなたに「ありがとう」といった)/She excused herself and went out of the room. (彼女は「失礼します」といって部屋を出た) など。また上例 [EMIL] で、asked his mother how she was では、この日英の違いは生じず、hoped business was good では、ふたたび生じるのは、ask がある種の発話を表わす動詞であるのに、hope が内的な心の動きを示す動詞であるからである。⁹⁾

9) ドイツ語原文：...er...wünschte dem Emil gute Reise und erkundigte sich bei der Frau Mutter nach dem werten Befinden und dem Geschäftsgang. 英語とはほぼ同じである。

5) 名詞表現

日本語で動詞的に表現するところを、英語で名詞的に表現するということも、よく指摘されている。

So Little Inch-High had to swim and swim until he reached the river bank. Fortunately, he was a good swimmer—he could swim like a fish.¹⁰⁾ [JAPANESQUE]

(一寸法師は岸にたどりつくには、うんと泳がなければならなかった。さいわい、彼は泳ぎがうまかった。水泳にかけては河童並みであった。)

he was a good swimmer は he could swim very well ともすることができるが、名詞的に表現することもふつうである。She was a good singer (dancer), a slow learner など。日本語では「泳ぎ手・歌い手」などとするとふつう特定の意味が生じる。

Moreover he was a great reader of weekly magazines; he studied their society and gossip columns with care and an unparalleled knowledge of the comings and goings of celebrities. [MAIGRET]

(その上、彼は週刊誌をよく読んだ。社交欄・ゴシップ欄を、注意深く、そして有名人の往来についての比類ない知識でもって、くわしく調べた。)

この例では、日本語でも「熱心な読者だった」などとすることもできるが、一般に、日本語では、英語のように、この種の表現法を自由に使いこなせない。次のタイプのものも、名詞表現といえるだろう。

Pony ... had a good look round, but she could not see another flower stall. [EMIL]

10) この用例に見られる swim and swim の反復による強調、swim like a fish のような simile の多用も、英語らしい表現法である。

(ポニーは、あたりをよく見まわしたが、他に花屋の屋台は見当らなかった。)

Seeing me, he rushed out and gave me a playful shove.

[LONDON]

(私を見ると彼は走り出てきて、私をいたずらっぽくつついた。)

His wife shot him a swift, warning glance. [HOTEL]

(彼の妻は、彼に、すばやく一瞥をくれて、注意をうながした。)

上の各例で、たとえば、... *shoved me playfully* とすることもできるが、*gave a playful shove* を用いるのは、「副詞終りより名詞終りのほうが音調上力強い」「副詞の多くは *-ly* の語尾で終るので、単調になりやすい」「さらに修飾語を加えていくときに、名詞構文のほうが加えやすい」などの理由が考えられる。

このような表現法を可能にするためには、無色な動詞 *get, give, have, take* などを発達せしめていることが必要である。また上の最後の例 [HOTEL] では、*give* の代りに *shoot* を用いることによって、*give* の基本的意味に加えて、*sharp, sudden* などの語感をプラスしている。

6) 助数詞表現

a *sheet* of paper, a *train* of thought, a *piece* of advice, a *cup* of tea などのイタリクスの語を numerative (助数詞) と呼ぶ。その働きは、物質名詞、抽象名詞など uncountable noun を countable 化すること (two sheets of paper, many cups of tea) の他に、*sheet* (薄く平たいもの)、*train* (尾をひくように連なり従うもの) のように、その物質や抽象体が現在とっている形状を表現する働きがある。

The pin ... stuck in, and left a bead of red blood when he pulled

it out. [EMIL]

(ピンがささっていた。それを抜くと小さな赤い血の玉が残った。)

出血にもさまざまな形状があるが、ここでは a bead of でそれを表わしている。次の例とくらべよ。

Holly rubbed her forehead, leaving a smear of blood from a cut finger. [BREAKFAST]

(ホリイがおでこをこすると、切り傷を負った指の血がついた。)

smearは「しみ」のような形状である。

He took a sip of wine to give him courage ... [JAPANESE]

(彼は勇気をふるいおこすために、酒をひとすずりした。)

この例ではHe sipped wine ... のように動詞的に表現できるが、「ひとすずり」と回数を用いるときには、このように sip を名詞化したほうがいいやすい。

...the giant moon rode high and fast through wisps of mackerel cloud. [TWICE]

(大きな月が、筋状にひろがったいわし雲の空に、高く、速くのぼった。)

wisp は a wisp of straw (hair, smoke) などとしても用い、比較的細い束状のものをさす。上例では wisps と複数形にすることによって、「幾筋もの」「筋状の」雲のようすを形容している。次例も参照のこと。

Not a wisp of wind stirred in the trees, ... [TWICE]

(風はそよとも吹かず、木々がそよめくこともなかった。)

この例でも, *wisp* が「細い, わずかな」といった語感をそえている。

同じような表現法は, 複数の *countable nouns* に前置する *a group of boys* のような場合にも見られる。*a group of boys*(男の子の集まり)の基本的意味に加えて,

a crowd of boys (密集した, 雑然とした (集まり))

a mob of boys (秩序のない, 無法な (集まり))

ranks of boys (横に並び, 幾列かになっている (集まり))

の意味を加えている。

Henderson fired a torrent of instructions at him in fluent Japanese ... [TWICE]

(ヘンダースンは、彼に、流暢な日本語で、指示を雨あられと浴びせた。)

「指示を与えた」の基本的意味に, *a torrent of* が「烈しい勢い」「ほとばしるような速さ」の意味を加えている。なお, この例では, *fire*(弾丸を発射する)という動詞も, その意味に一役を買っている。

日本語でも, 「大輪の菊, 八重の桜, 一連の問題, 一握の砂, 一頭の馬」など対応する表現があるが, 英語のほうが語彙的に自由で豊かな感じを受ける。

(3)

Mary Goodnight looked up at him and said calmly, 'M. wants you. He rang down half an hour ago.' 'Who's M.?' Mary Goodnight jumped to her feet, her eyes flashing. 'Oh for God's sake, James, snap out of it!' [TWICE]

(メアリー・グッドナイトは彼を見上げて落着いていった。「Mが御用です。30分前にお電話がありました」「Mって誰のことだい？」メアリーは、びっくりして、パッと立ち上がり、きつとにらんだ。「ジェイムズ、何てことをノ¹¹⁾しっかりしてくださいノ」)

上例の文脈に見られる *Mary Goodnight jumped to her feet* の文を分析してみよう。jumpの語義は *move oneself suddenly from the ground, etc. by using the leg muscles*, つまり、「とび上がる」である。to her feetは「彼(自身)の足に至るまで」の意味だから、動作の方向と終着点が表示されている。結局、通例、座っている姿勢から、「立ち上がる」の意味になる。

同じ動作は、基本的には、*She got to her feet/She rose to her feet* などと表現できる。一方、jumpは、ここでは、「(立った姿勢から、その場で)ピョンととび上がる」というような、「立ち上がる」というのとは別の動作を意味しているのではなく、その動作の概要は同じである。異なるのは、動作の勢いであり、それが jump という語によって与えられている。結局、文全体としては、「とびあがるかのような勢いで立ち上がる」の意味を表現している。

She jumped to her feet. ... (A)

| | | | |
|-----|--------|--------------|---------|
| She | jumped | to her feet. | ... (B) |
| | got | | |

上の図のように、(A)の文の奥には、(B)のような意味構造が透視されていることになる。

以下に、この種の表現法を概観してみる。

1) ...with some stings from nettles and pricks from thorns, they struggled out of the thicket. [CASPIAN]

11) 当然知っている上司の名を、忘れたかのようなぼんやりした返事をしたのに対する反応。

(イラクサにチクチクやられ、トゲにさされながらも、彼らは茂みを悪戦苦闘して抜け出した。)

struggle 自体は、元来、to contend or fight violently with an opponent の意味である。ここでは

they [came] out of the thicket

という構造を与えられ、それに、struggle の「大いに難儀して」「悪戦苦闘の末」といったニュアンスが付加される。

I was only half conscious, but I managed to crawl out of bed, struggle to the lavatory and be sick. [FAN]

([ガス中毒にかかり]私は意識がもうろうとしていたが、やっとのことで、ベッドを這い出し、よろめきながらトイレにたどりつき、吐いた。)

When he had struggled up to the surface, the boat was many yards away. [WALK]

([海につきおとされた]彼が、もがきにもがいて、やっど水面に達すると、舟はもう、何ヤードも向こうに進んでいた。)

日本語では、上例 [FAN] 中の crawl out の訳語「這い出る」のように、補助動詞の用法に一脈通じるところがある。この例で、「～出る」は out と同じく、「這う」という動作に対し、方向性を与える副詞的な役割を果たしていると見えるが、単に「出る」という代りに、「這い出る」「とび出る」などと、動詞を前に付加して、動作の様態を示しているとも見え、そうであれば、ここに述べている英語の表現法と似ている。しかし、日本語のこの種の用法も、英語ほどの多様性、融通性はなく、副詞的に表現するのが一般的で自然である。¹²⁾

12) 英語でも、副詞(句)によって、動作の様態を表現するのが基本であることはいうまでもない。
Ex. He got painfully to his feet, stretched and sat down again...[TWICE]

なお *struggle* は次のようにも使える。

They struggled into their uniforms.

He struggled to his feet.

I struggled my way into the packed train.

She was struggling out of her boots.

いずれも、動作の概要は構文の中で与えられ、動詞自体は、動作の様態を述べる役割を果たしている。

2) Born on New York's Lower East Side, Cagney *fast-talked his way into* a vaudeville dancing job when he was 20, ... [TIME]

(ニュー・ヨークのロワー・イースト・サイドに生まれたジェイムズ・キャグニーは、20才のとき、独特の早口を生かして、¹³⁾ ボードビルのダンサーの仕事にありついた。)

下線部の表現の背景には、まず次のような基本形がある。

He made his way into the crowd.

次に、それを下敷にして、進みかたの様態を表現する用法がある。

'Friends, we are in Archenland!' said Bree proudly as he *splashed and churned his way out* on the Northern bank. [HORSE]

(「諸君！アーケンランドに着いたぞ！」とブレー[物をいう馬]は、ほこらしげにいい、水をブルブルはねちらしながら、北岸に上がった。)

川を泳いで渡っていた馬が、対岸に上がる動作だが、*splash* と *churn* の二つの動詞は、体をブルブルとふるわせて、水をパシャパシャとはねとばす様態

13) こは「早口を芸にして」とも「あの独得の早口のごときスピードで」ともとれる。

14) を表現している。

先の用例 [TIME] は、かなり恣意的なジャーナリスティックな用法ではあるが、それでも意味が充分に通じるのは

| | | |
|----|-------------|------------------|
| He | fast-talked | his way into ... |
| | made | |

という構造に支えられているからであろう。

この例などを見ると、極端に言えば、英語では、しかるべきわく組みが与えられれば、その動詞の位置には、必ずしも慣用的でない無数の動詞が、(そして、名詞→動詞の品詞転換が容易であるから、同種の無数の名詞が)、潜在的には来うともいえる。

3) 次の諸例では、動作の様態というより、動作に伴なう音響が動詞によって表現されている。

The ship throbbed grandly through the endless horned¹⁵⁾ islands.
[TWICE]

(船は無数の角立てた島々の間を堂々と、エンジンの音を快調に立てながら進んだ。)

throb は、本来、心臓の動悸の音なので、ここでは、ポンポンポンといった、あまり高くない、順調なエンジンの音を表現している。

Trains thundered by on the overhead railway, Other trains rum-
bled beneath them on the underground.¹⁶⁾ [EMIL]

14) out は「水中から外へ出る」感じを表わす。churn は、本来、名詞で milk を攪拌する機械である。

15) James Kirkup の日本旅行記 *These Horned Islands* をふまえた表現。

16) ドイツ語原文: Die Hochbahn donnerte vorüber. Die Untergrundbahn dröhnte. ほとんど同じ表現法である。

(高架の電車は、ガーガーと音を立てて通りすぎ、地下の電車はゴロゴロと走った。)

thunder と rumble は、どちらも雷の音だが、前者のほうが激しい音である。

‘Can you rattle right over here? It’s important,’ ... [BREAKFAST]

(「大いそぎでここへ来れないか? 重要な用件なんだ。」)

rattle は、ガタガタといった音であるが、この場合は、Can you come over here? といった基本形と重なって、文字どおり音を立てるのではなく、「いそいで、あわただしく来る」といった意味を表わしている。

4) ‘How would you like to lie awake listening for Uncle Andrew’s step to come creeping along the passage to your room?’

[NEPHEW]

(夜、目を覚まして、アンドルーおじさんが、君の部屋へ、廊下をそうつとやってくるのを聞いていたいなんて思うかい?)

このような形は、表現法上、

to come stealthily along...

to come creeping along...

to creep along...

のように中間的に位置する形式であろう。次もその例。

‘...she must be rich. You got to be rich to go mucking around in Africa.’ [BREAKFAST]

(「彼女は金持ちになっているに違いないよ。でなきゃ、アフリカくんだりをほっつき歩いていられやしないさ。)」

muck は、名詞として、「牛・馬の糞」のことで、動詞として、「汚す」の意味。ここでは、「ブラブラ遊ぶ」「あてもなく歩きまわる」という意味をぞんざいに表現している。

5) 次の諸例の動詞は、本稿で扱っている移動の意味を与えられる動詞ではないが、動詞が一定のワクの中で様態を表わす働きをするという点で共通するところがある。

‘What on earth’s going on here?’ demanded the manager. [EMIL]

(これは、いったい、どういうことなんだ?)と支配人は、きびしい声でいった。)

‘Whatcha want?’ he barked. [SISTER]

(「何の用だ?」と彼はどなった。)

‘Who the hell are you?’ he growled.

(「てめえは、いったいだれだ?」彼はうなるような声でいった。)

これらは、いずれも say に代わって、「いう」という行為に伴なり音声の感じ、態度などを表現している。次例は talk の代用である。

She rattled on cheerfully about the shooting and the scarcity of birds, and the prospects for duck in the winter. [WINDOW]

(彼女は、射撃のこと、鳥が少ないこと、この冬の鴨猟の見込みなどをペ

チャクチャとしゃべった。)

6) The black Topoyet[sic]hurtled through the deserted streets...

[TWICE]

(黒のトポエット[車]は、人気のない通りを猛烈な勢いでつっぱした。)

この例で、turtleは to dash with great force or crushing impact; to move swiftly and with great forceの 意味であるから、「through～以下の副詞句が与えられているので移動の意味が生じた」というより、本来、runの同義語またはそれに準じる語であるといえる。その意味で、本稿で注目した、一定のワクの中で移動の意味が与えられる動詞とはやや異なる。しかし、runのような移動を表わす基本的な動詞に対して、それに様態の記述を加えるために、副詞的方法によるのではなく、動詞そのものを取りかえる表現法という点では一致している。

walk や run の同意語が多いのは、日本語にくらべての英語の特徴であり、たとえば *Webster's Collegiate Thesaurus* は run の同義語として、

dash, scamper, scoot, scurry, shin, sprint

同義語に準じる関連語(related words)として

career, course, race, bustle, hurry, hustle, rush, speed; scorch

対照的な意味を持つ語(contrasted words)として、

crawl, creep, drag, inch, mosey, poke, saunter, stroll, toddle

をあげている。

She ... hurried out of the kitchen into the front room. [EMIL]

(彼女は、台所からあわただしく出て、表の間へ入った。)

hurry は、上のリストの中で、関連語に入っているが、to move or act

with haste; move faster than is comfortable or natural の意味であり、したがって、*She hurried* だけでは何をしているのか明確でない。いわば、この構造によって、*move or act* のどちらかが決定されるといえよう。

Holly darted up and down the block,... [BREAKFAST]

(ホリイは、その街区を、あちこちとかけまわった。)

Bree shot away like an arrow... [HORSE]

(ブレーは、矢のように走り去った。)

以上の2例の動詞 *dart, shoot* は、それ自体移動の意味を含み、*run* の同義語ないし関連語といえるが、*sudden, quick* などのニュアンスを加えている。

一方、*walk* に対しては、同 *Thesaurus* は、

同義語 *ambulate, foot(it), hoof, pace, step, traipse, tread, troop*

関連語 *circumambulate, perambulate, promenade, ramble, stroll;*

hike, tramp; lumber, plod, slog, stride, stump, trudge; leg, race,

run

対照語 *drive, ride*

をあげている。

It took weeks of after-work roaming through those Spanish Harlem streets,... [BREAKFAST]

([行方不明の猫を探しあてるのには]何週間も、スパニッシュ・ハーレムの通りから通りへと、仕事帰りに、歩きまわらなければならなかった。)

roam は、*ramble, wander* の同義語で、つまり、*Thesaurus* の分類でいえば、*walk* の関連語である。上例で、*walk* の代わりに *roam* を使うことによって、その地域のどこを目指してということもなく、さまよい歩くというニ

ニュアンスを持たせている。

...he could not get through the mass of children which seemed to stream across his path whichever way he turned. [EMIL]

(彼がどこへ曲がっても、遅れることもなく、あとをついてくる子供たちの群れを振り切ることはできなかった。)

stream は、元来、小川などの流れのことなので、それ自体移動の意味があり、run または walk の関連語といえるが、「切れ目のない」「かなりの勢いの」といったニュアンスを加えている。

7) 元に戻って、いくつかの例を検討する。

'Thanks. This is really kind of you...' 'Don't mention it,' Philip said, bowing himself out of the room. [PLACES]

(「ありがとう。御親切さま…」「どういたしまして」とフィリップは言って、おじぎをして、部屋を出た。)

下線部は、and bowed and went out of the room とパラフレーズできる。bow 自体には、前後の動きの意味はないが、～out of the room のワクの中で go に相当する動きの意味が与えられている。

Mr Kästner bundled the boys into his car... [EMIL]

(ケストナー氏は、男の子たちを、自分の車にほうりこんだ。)

bundle は、「たばねる」「包む」が基本的な意味だが、ここでは、「無造作に」といったニュアンスを付加している。

なお、辞書に *to send hastily or without ceremony* の語義が認められているが、かといって、*He bundled the boys* だけでは、「送りこむ」「乗りこませる」などの意味になることはなく、したがって、辞書にも、(*away, off, out or into*)と付記してある。つまり、辞書は、*bundle* が、このような構造を与えられたときに、この意味が生じること、しかも、それが慣用的であることを記述しているのである。

(4)

国広(1970)は、*shoulder one's way* という表現には、*make one's way* との意味的な重層性が見られるとしている。¹⁷⁾ また巻下(1984)は、*crawl under the fences* や *wipe the soap out of his eyes* などの例を「動詞の代替可能性」「前置詞句の述語性」などの概念で説明している。¹⁸⁾ これらは、いずれも本稿の考えかたと共通しているが、本稿では、対象を、国広(1970)より広く、巻下(1984)よりせまくとった。

本稿の(3)で考察した英語表現法上の特徴を、より一般的にいうと、ある一定の意味的特徴を備えた語が置かれるべき位置に、そのような特徴を持たない語が置かれたとき、その特徴があるかのように、あるいはその特徴を補なって、意味解釈されるということである。十分な検討をしたわけではないが、この性質は、英語には顕著であり、日本語にはとぼしい。

品詞転換や、動詞の自他の転換が、英語では比較的よく行なわれるのも、この性質と関係があるだろう。さらに、この性質は、英語の(分析的傾向に対する)総合的傾向の一例といえるだろう。一方、この種の表現法が採用されるのは、語彙・表現型の変化を要求する英語の修辭的傾向に促されているためと思われる。

17) 同書 pp. 209-211.

18) 同書 pp. 36-85.

<引用出典表>

用例を採集した作品名は、本文中では略記した。以下は、この略名のアルファベット順でのリストである。

| | |
|-----------|--|
| BREAKFAST | Truman Capote, <i>Breakfast at Tiffany's</i> |
| CASPIAN | C. S. Lewis, <i>Prince Caspian</i> |
| DEEP | Patricia Highsmith, <i>Deep Water</i> |
| EMIL | Erich Kästner, <i>Emil and the Detectives</i> (English translation by Eileen Hall) |
| FAN | James Kirkup, <i>Japan behind the Fan</i> |
| HORSE | C. S. Lewis, <i>The Horse and his Boy</i> |
| HOTEL | Arthur Hailey, <i>Hotel</i> |
| JAPANESE | James Kirkup, <i>Folktales Japanese</i> |
| LAUGHTER | Vladimir Nabokov, <i>Laughter in the Dark</i> |
| LONDON | Paul Theroux, <i>The London Embassy</i> |
| MAIGRET | Georges Simenon, <i>Maigret and the Reluctant Witnesses</i> |
| NEPHEW | C. S. Lewis, <i>The Magician's Nephew</i> |
| PLACES | David Lodge, <i>Changing Places</i> |
| SISTER | Raymond Chandler, <i>The Little Sister</i> |
| TIME | <i>TIME Capsule</i> , May 1986 |
| TWICE | Ian Fleming, <i>You Only Live Twice</i> |
| WALK | Patricia Highsmith, <i>Those Who Walked Away</i> |
| WINDOW | Saki, "The Open Window" |

<参考文献表>

- 榎垣 実 (1975) 『日英比較表現論』大修館書店。
 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』三省堂。
 田桐大澄 (1965) 「日英語の表現の比較」[現代英語教育講座第7巻『日英語の比較』] 研究社出版。
 中野道雄 (1982) 「発想と表現の比較」[日英語比較講座第4巻『発想と表現』]大修館書店。
 長谷川潔 (1974) 『日本語と英語——その発想』サイマル出版会。
 卷下吉夫 (1984) 『日本語から見た英語表現 —— 英語述部の意味的考察を中心として』研究社出版。
 宮尾正夫 (1982) 「英語における表面接触動詞と 'I patted the boy on the shoulder' 型」
 [Kwansai Review, No. 2]